

## 盲導犬取得に対する視覚リハの影響

日本盲導犬協会の視覚リハサービス利用者へのアンケート調査より

○菅原 美保、内田まり子、畑野容子、原田敦史、安山周平  
財団法人 日本盲導犬協会

### 1. はじめに

2005年から2009年5月までに財団法人日本盲導犬協会仙台訓練センターに盲導犬を申し込み、ユーザーとなった26名のうち14名(56%)が当協会では実施している視覚障がいリハビリテーション(以下視覚リハ)を利用していた。このことから視覚リハの利用が盲導犬取得にどのように影響しているかを調査した。

### 2. 対象と方法

#### (1) 対象

当協会では実施したセンターに宿泊して視覚リハを行う短期リハビリテーション(以下短期リハ)、及びご自宅へ訪問して訓練を行う地域サポートサービス(以下SS)利用者合わせて210名。

#### (2) 方法

アンケートは当協会職員が電話で質問用紙を読み上げる形で実施した。

アンケート結果を分析し、項目により日本財団の「盲導犬に関する調査研究(平成10年)」と比較して報告する。

アンケート回答数は156(約75%)である。

### 3. アンケート項目

- ・ 盲導犬を希望したいと思いませんか
- ・ 盲導犬の詳しい話を聞いてみたいですか

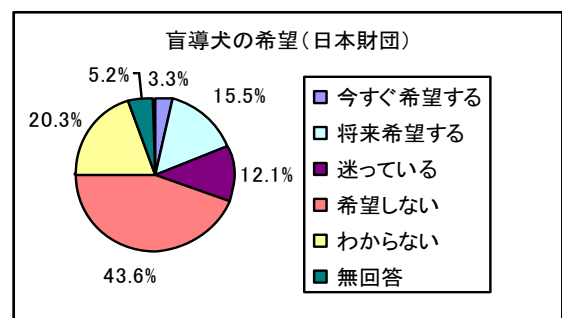
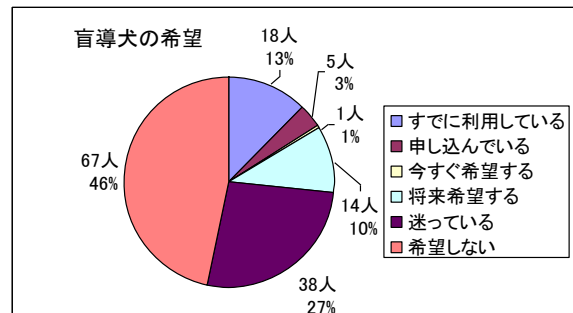
- ・ 盲導犬と歩く体験をしてみたいですか
- ・ 盲導犬との生活体験を2泊3日程度実施するとしたら参加したいですか
- ・ 盲導犬を今すぐ希望しない、迷っている理由は何ですか

など10項目である。

### 4. 結果

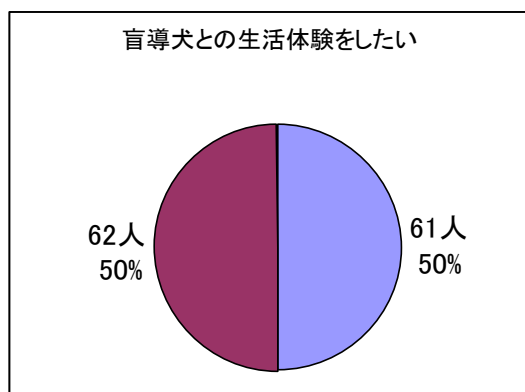
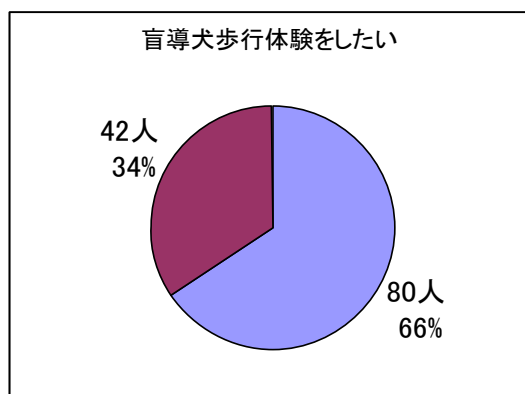
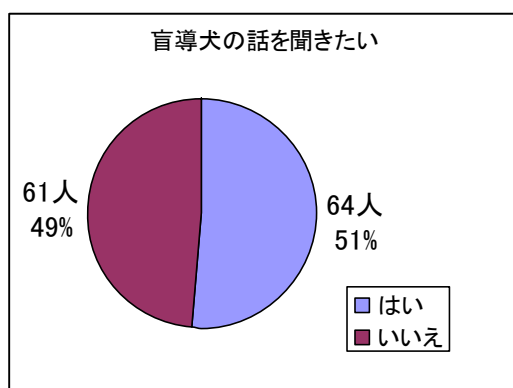
#### (1) 盲導犬の希望

日本財団の調査によると「盲導犬を今すぐ希望する、将来希望する」をあわせると19%であるが、それに対し、今回のアンケート結果では「すでに利用している、すでに申し込んでいる、今すぐ希望する、将来希望する」とあわせると27%と日本財団の調査と比較し、多いという結果となった。



## (2) 盲導犬についての体験希望

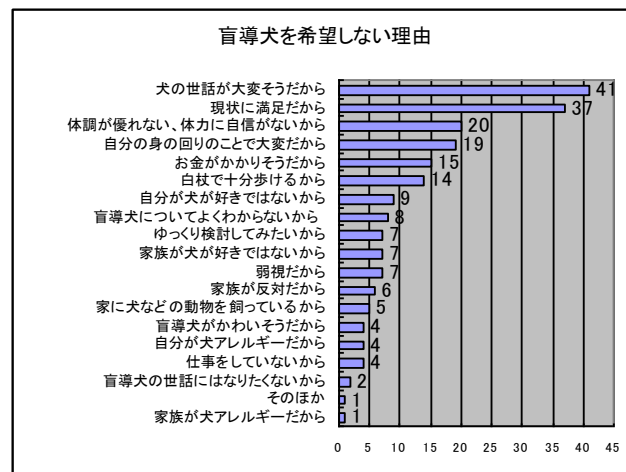
盲導犬歩行体験および生活体験を希望する方が半数以上いるという結果を得たことから、盲導犬の希望に関するアンケートに「希望しない」と回答した45%の中にも体験をしたいと思っている方がいるということがわかった。



## (3) 盲導犬を希望しない理由

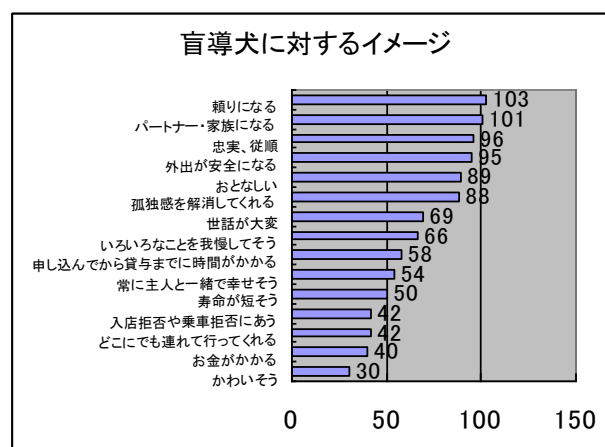
盲導犬を希望しない理由の一番には「世話が大変そう」というのが挙がっている。

盲導犬を希望しない理由の上位に「犬の世話が大変そうだから」「現状に満足だから」が挙がっているというのは、日本財団の結果と同様である。



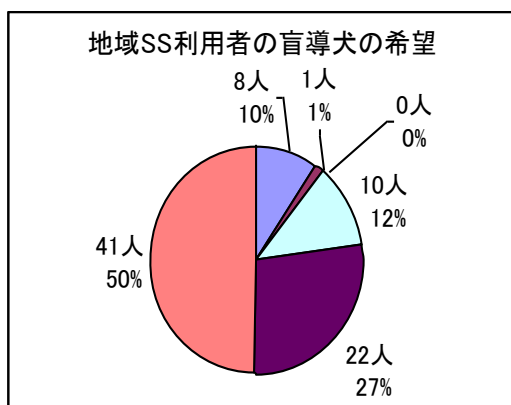
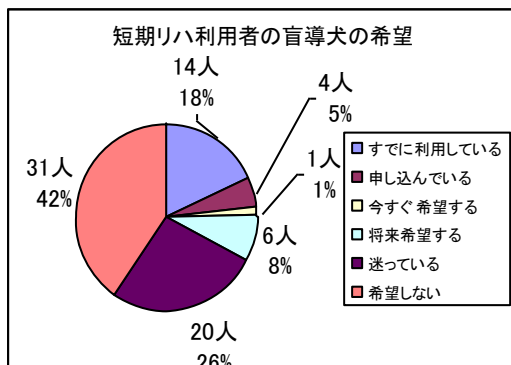
## (4) 盲導犬に対するイメージ

盲導犬に対するイメージの上位に「賢い」「頼りになる」となどが挙がり、こちらも10年前の日本財団の結果と同様である。また、実際の盲導犬とは異なるイメージである「寿命が短そう」「どこにでもつれていってくれる」というイメージを約30%の方が持っている。



(5) 利用事業別盲導犬の希望

2つの事業利用者に分けて盲導犬の希望についてアンケート集計を行った。



「盲導犬を申し込んでいる、今すぐ・将来希望する」人数は短期リハ利用者では14%、SS利用者では13%と大きな差はなかった。「迷っている」割合も大きな差はない。違いとして現れたことは、短期リハ利用者の「盲導犬をすでに利用している」割合が多いということが挙げられる点である。

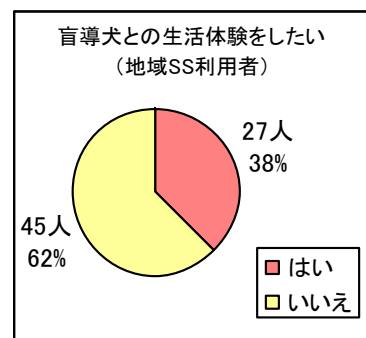
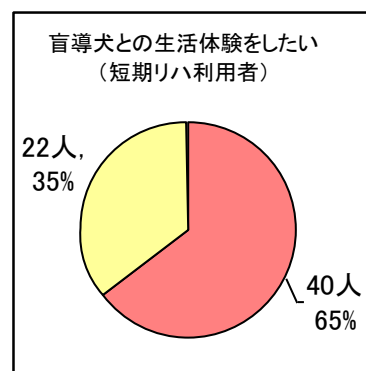
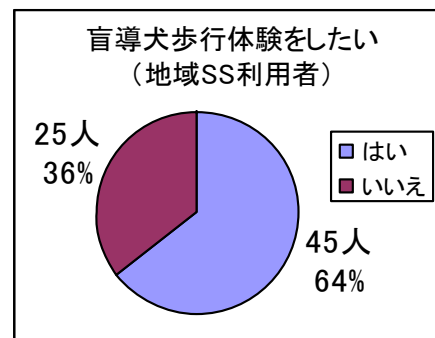
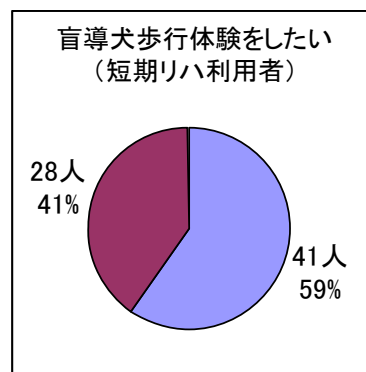
盲導犬をすでに利用している方の詳細は、短期リハ利用者で現在盲導犬ユーザーである14名中13名は短期リハ利用後に盲導犬を取得しており、同様にSS利用者で現在盲導犬ユーザーである7名中6名がSS利用後に盲導犬を取得している。

(6) 利用事業別盲導犬体験の希望

盲導犬との歩行体験の希望に関しては短期リハ利用者とSS利用者との大きな差は

見られない。

しかし、盲導犬との生活体験に関しては、短期リハ利用者は「希望する」が65%なのに対し、SS利用者は38%と差が見られた。



## 5. 考察とまとめ

### (1) 結果 (1) ～ (5) より

当協会の視覚リハ利用者には盲導犬への興味がある人の割合が日本財団の調査と比較してやや多いということが言える。このことから、視覚リハを利用することがきっかけとなり、盲導犬を歩行手段の一つとして捉えることができ、結果として盲導犬への関心が高まったり、取得へつながったりすることが分かった。

しかし一方で、盲導犬に対するイメージなどの結果から考えると、情報提供は十分であるとは言いがたく、視覚障がい者は「盲導犬」に関する情報を正しく得る機会を逸している可能性があることもわかった。

これらのことから、当協会では視覚リハを提供する際に盲導犬に関する情報提供を行うことは有効であるが、その提供の仕方には更なる工夫が必要であると言える。

### (2) 結果 (6) ～ (7) より

視覚リハとの関係とは異なる部分ではあるが、今回のアンケート調査では、宿泊を伴う盲導犬との生活体験について、短期リハ利用者と SS 利用者との間で差が見られた。この結果は、宿泊を伴う短期リハを利用した方と在宅での SS を利用した方との間に「宿泊を伴うことが可能かどうか」という点が差として現れたのではないだろうか。このことから盲導犬の取得を考えるにあたり、自宅を離れることが可能かどうかという点でためらいや諦めが生じていると考えられる。

これらのことから、視覚に障がいのある方が盲導犬を取得するために必要なニーズをさらに分析する必要がある、その方のニーズに応じた訓練形態などを検討すること

で、盲導犬という歩行手段を選択肢に加えることができる方が増えるのではないだろうか。

## 6. 今後と課題

視覚障がい者が「盲導犬」という歩行の手段を選択肢として加えて考えることができるようになるためには、視覚リハを提供する際、盲導犬についても積極的に情報提供を行う必要があると考えられ、さらには盲導犬協会以外の施設や関係機関においても盲導犬に関する情報提供が行えることが望ましい。

そのためには、当協会だけではなく、他の関係機関においても盲導犬について正しい情報提供を行うための仕組みを作りたい。